

# 男性家族介護者の介護役割と男性性

水島 洋平

## あらまし

本稿の目的は、男性規範の呪縛のなかで男性家族介護者が抱える介護役割遂行の困難さを、男性性と男性のコミュニケーション特性の視点から考察することにある。男性家族介護者は、伝統的な男性規範によって行動や考え方が縛られることで、他者との「関係性」や「親密性」を構築・維持することが困難な状況に置かれており、そのことが地域関係や社会関係の縮小につながっていると推測される。

本稿では、男性規範の呪縛のなかで男性家族介護者が抱える介護役割遂行の困難さを、男性性と男性のコミュニケーション特性の視点からアプローチするために、まず、男性性の特質と男性のジェンダー役割について論じた。次に、伝統的な男性規範だけではなく男性のコミュニケーション特性も、男性家族介護者の介護役割遂行に困難をきたしているのではないかという問題意識の下、男性のコミュニケーション能力の形成要因に焦点をあて、男性のコミュニケーション特性を3つの観点から整理した。そして、

男性家族介護者の先行研究のなかから、男性性と男性のコミュニケーション特性に関わる論点の整理と考察を行なった。最後に、男性性と男性のコミュニケーション特性の影響のために、地域関係や社会関係が希薄になりがちな男性家族介護者の社会的孤立を防ぐための支援策として、アサーション・トレーニング (assertion training) を提案した。

## 1. 問題意識

本稿の目的は、男性規範<sup>1</sup>の呪縛のなかで男性家族介護者<sup>2</sup>が抱える介護役割遂行の困難さを、男性性と男性のコミュニケーション特性の視点から考察することにある。従来、「ジェンダーを前提とした親族関係の義務<sup>3</sup>」に則って、介護は女性の役割として位置づけられてきた<sup>4</sup>。しかし、「ジェンダーを前提とした親族関係の義務」をめぐる規範が弛緩することによって、新たな家族介護の担い手として、妻を介護する「夫」や老親を介護する「息子」といった男性

<sup>1</sup> 多賀太『男性のジェンダー形成—(男らしさ)の揺らぎのなかで』東洋館出版社, 2001年, 18 - 19ページによれば、男性性と女性性は「男性はどうあるべきか、何をすべきか」、「女性はどうあるべきか、何をすべきか」を指示し、男性と女性の行動のあり方を規制するとしている。そこで、男性性と女性性がそうした社会規範として作用する場合、特に、それぞれを「男性規範」、「女性規範」と呼び、それらを包括して「ジェンダー規範」と呼んでいる。

<sup>2</sup> 本稿では、職業として介護を行なっている男性介護労働者と区別するために、家族介護を行なっている男性を「男性家族介護者」と表記する。なお、家族介護を行なっている男性を「男性介護者」と表記している先行研究もあるが、そのまま使用する。

<sup>3</sup> 詳しくは、Ungerson, C., *Policy is Personal: Sex Gender and Informal Care*, Tavistock, 1987. (平岡公一・平岡佐智子訳『ジェンダーと家族介護—政府の政策と個人の生活』光生館, 1999年)を参照。

<sup>4</sup> 春日キスヨ『介護問題の社会学』岩波書店, 2001年, によれば、わが国における介護をめぐる構造的特性は、「介護＝女性の役割とみなすジェンダー規範が支配する社会」であると指摘している。

<sup>5</sup> 津止正敏・斎藤真緒『男性介護者白書—家族介護者支援への提言』かもがわ出版, 2007年, 17ページによれば、男性介護者の登場の背景は、大別して2つの理由によって不可避であるとしている。第一に、戦後の高度経済成長によってもたらされた、大家族制から核家族への移行という家族構成の劇的な変容が挙げられる。このことによって、大家族制で機能してきた介護規範、すなわち夫は妻や嫁が、妻は嫁や娘が看取るという家族介護の世代間循環が破綻し、配偶者間介護へ劇的にスイッチした。第二に、女性の社会参加と地位向上の進展など、性別役割分担を当然視するかのようないデオロギーへの批判や、男女雇用機会均等法など具体的な政策の登場により、ジェンダー規範が揺らいでいることが挙げられる。

家族介護者が登場している<sup>5</sup>。また、核家族化や高齢夫婦世帯の増加など、わが国における高齢者介護と家族を取り巻く状況は変化してきており、今後も男性家族介護者の割合は増加することが予想される。

女性が伝統的な女性規範によって行動や考え方が縛られるのと同様に、男性も伝統的な男性規範によって行動や考え方が縛られ、心理的に抑圧されている傾向が見られる。例えば、「男は弱みを見せない」、「男は弱音を吐かない」、「男は常に冷静で感情を抑制しなければならない」、「男は独立的でなければならない」、「問題は自分ひとりで解決しなければならない」といった伝統的な男性規範に忠実に従った行動をとれば、男性家族介護者が他者との関係において、悩みや苦しみを打ち明けて、「親密さ」を獲得することは困難であろう。そのため、男性家族介護者は介護問題をひとりで抱え込み、社会的に孤立する傾向が見られる。

一方、これらの伝統的な男性規範から逸脱した行動をとると、そのことに対する不安や焦燥感が、男性家族介護者のジェンダー・アイデンティティを揺るがせ<sup>6</sup>、高齢者虐待<sup>7</sup>や介護殺人・心中事件<sup>8</sup>などの社会問題を生み出すことにつながる可能性があると考えられる。このように、男性家族介護者は、伝統的な男性規範によって行動や考え方が縛られることで、他者との「関係性」や「親密性」を構築・維持することが困難な状況に置かれており、そのことが地域関係や社会関係の縮小につながっていると推測される。

本稿では、男性規範の呪縛のなかで男性家族介護者が抱える介護役割遂行の困難さを、男性性と男性のコミュニケーション特性の視点からアプローチするために、まず、男性性の特質と男性のジェンダー役割について論じる。次に、伝統的な男性規範だけではなく男性のコミュニ

ケーション特性も、男性家族介護者の介護役割遂行に困難をきたしているのではないかという問題意識の下、男性のコミュニケーション能力の形成要因に焦点をあて、男性のコミュニケーション特性を3つの観点から整理する。そして、男性家族介護者の先行研究のなかから、男性性と男性のコミュニケーション特性に関わる論点の整理と考察を行なう。最後に、男性性と男性のコミュニケーション特性の影響のために、地域関係や社会関係が希薄になりがちな男性家族介護者の社会的孤立を防ぐための支援策として、アサーション・トレーニング (assertion training) を提案する。

## 2. 男性のジェンダー役割と男性のコミュニケーション特性

本章では、男性規範の呪縛のなかで男性家族介護者が抱える介護役割遂行の困難さを、男性性と男性のコミュニケーション特性の視点からアプローチするために、まず、男性性の特質と男性のジェンダー役割について論じる。次に、伝統的な男性規範だけではなく男性のコミュニケーション特性も、男性家族介護者の介護役割遂行に困難をきたしているのではないかという問題意識の下、男性のコミュニケーション能力の形成要因に焦点をあて、男性のコミュニケーション特性を3つの観点から整理する。

### 2.1 男性性の特質と男性のジェンダー役割

#### 2.1.1 男性性とは何か

男性性・女性性とは、文化的・社会的に男性

<sup>6</sup> 多賀太「男性のジェンダー形成における抵抗」(榎本博明編『現代のエスプリ別冊 セルフ・アイデンティティ—拡散する男性像』至文堂, 2007年), 47ページによれば、「伝統的男性規範と自己のあり方が整合するとき、男性のジェンダー・アイデンティティの感覚は、より安定的で肯定的なものとなる。逆に、伝統的男性規範と自己のあり方との間のギャップが大きければ、男性のジェンダー・アイデンティティの感覚は、より不安定で否定的なものになる」と述べている。

<sup>7</sup> 小林篤子『高齢者虐待—実態と予防策』中央公論社, 2004年, 1ページによれば、「介護放棄や言葉の暴力を含む、あらゆる形の虐待を許さないためには、『被害者を救う』という積極的な姿勢を打ち出すとともに、介護者への総合的な支援策を考えるべきではないか」と問題提起をしている。

<sup>8</sup> 介護殺人・心中事件に関しては、加藤悦子『介護殺人—司法福祉の視点から』クレス出版, 2005年, が詳しいので参考にされたい。

<sup>9</sup> 鈴木淳子「ステレオタイプとジェンダー—男性性・女性性の変化」(鈴木淳子・柏木恵子『心理学の世界(専門編5) ジェンダーの心理学—心と行動への新しい視座』培風館, 2006年), 75ページ。同書, 71ページによれば、「ジェンダー・ステレオタイプとは、男性・女性という生物学的性によって分類された性別カテゴリーに基づくステレオタイプであり、具体的には、男女についての単純化されたイメージに基づく、固定的な認知の枠組み、あるいは信念である」と述べている。

と女性のそれぞれに望ましいと期待される特性に関するジェンダー・ステレオタイプである<sup>9</sup>。以下では、男性性とは何かを明らかにするために、男性性と女性性の典型的な発達の諸特徴、すなわち男性と女性が身につけるべきとされる諸特徴について概観する。

高橋・湯川 (2008) によれば、男性には、(1) 学業や職業などにおける成功と、高い知的能力を保持すること (知的・職業的達成、成功欲求)、(2) 独立的で自立した主体的な自己を保持すること (独立的自己、自己同一性の獲得)、(3) 論理的で権利と正義を重視した判断能力を保持すること (Kohlberg (1969) が提唱した「権利と正義の道徳性」) などが望まれている<sup>10</sup>。一方、女性には、(1) 知的な達成や成功を望まないこと (達成・成功の回避)、(2) 人間関係を重視し、親密な関係を形成・維持すること (親密性の獲得)、(3) 他者に依存し、他者との関係や感情から自分を捉えること (相互依存的自己)、(4) 物事の判断は、客観性や論理性よりも感情を重視し、他者への思いやりや責任をもとに行なうこと (Gilligan (1982 = 1986) が提唱した「ケアの道徳性」) などが望まれている<sup>11</sup>。

また、伊藤 (1993) は、男性性の特徴として「優越志向」、「権力志向」、「所有志向」という3つの心理的傾向を挙げている<sup>12</sup>。すなわち、伊藤 (2008) によれば、「優越志向」とは、競争に勝ちたい、他者より優越していたいという心理的傾向、「権力志向」とは、自分の意志を他者に押し付けたいという心理的傾向、「所有志向」とは、自分の所有物を自分のものとしてコントロールしたい、管理したいという心理的傾向を指すとしている<sup>13</sup>。他にも、Connell

(1995) は、ほとんどの文化や組織において、男性にはあらゆる面で支配的な立場に立とうとする傾向が見られるとして、「覇権的男性性 (hegemonic masculinity)」という概念を提唱している<sup>14</sup>。

## 2.1.2 男性のジェンダー役割

Brannon (1976) は、男性が守るべき役割規範を、(1) 女々しくないこと、(2) 人々に尊敬され、職業上で成功すること、(3) 自信にあふれ、常に冷静で弱みを見せないこと、(4) 攻撃的、冒険的で、リスクを恐れないこと、の4つの男性性ステレオタイプに分類し、男性がすべきこととしてはいけないことがイデオロギーとして存在することを明らかにしている<sup>15</sup>。これに対して、Pleck (1976, 1987) は、従来の男性のジェンダー役割のステレオタイプには多くの矛盾があるとし、男性がそれらのジェンダー役割に従うことは、葛藤、緊張やストレスなどを招くと指摘している。そして、男性のジェンダー役割を伝統的と現代的の2種類に分類して分析することを提案している<sup>16</sup>。

また、O'Neil (1981) は、男性のジェンダー役割の特性として、(1) 個人的な感情表出を抑制する傾向、(2) 達成や成功に囚われている傾向、(3) 他者への愛情や思いやりを示すことを抑制する傾向、の3つの傾向を挙げている<sup>17</sup>。そして、Doyle (1989) は、男性のジェンダー役割には、(1) 女々しくないこと、(2) 成功すること、(3) 攻撃的であること、(4) 性的な関心が強いこと、(5) 独立心が強いこと、の5つの要素があるとしてい

<sup>10</sup> 高橋恵子・湯川隆子「ジェンダー意識の発達—男らしさもつくられる」(柏木恵子・高橋恵子編『日本の男性の心理学—もう1つのジェンダー問題』有斐閣, 2008年), 54ページの表から引用し、一部改変したものである。

<sup>11</sup> 同上。

<sup>12</sup> 伊藤公雄『〈男らしさ〉のゆくえ—男性文化の文化社会学』新曜社, 1993年, 166 - 167ページ。

<sup>13</sup> 伊藤公雄『新訂 ジェンダーの社会学』放送大学教育振興会, 2008年, 84 - 85ページ。

<sup>14</sup> 詳しくは、Connell, R.W., *Masculinities*, Polity Press, 1995, pp.76 - 78. を参照。また、Thompson, Jr., E.H. (Eds.) *Older Men's Lives*, Sage, 1994. では、高齢男性の存在に着目し、職業を持っている若い男性を模範とする「覇権的男性性 (hegemonic masculinity)」の影響の下で、高齢男性が周縁化されていることを指摘している。

<sup>15</sup> 詳しくは、Brannon, R., *The Male Sex Role: Our Culture's Blueprint of Manhood and What It's Done for Us Lately*. In D. David and R. Brannon (Eds.), *The Forty-Nine Percent Majority: the Male Sex Role*, Addison - Wesley, 1976, pp. 1 - 48. を参照。

<sup>16</sup> 伝統的な男性役割では、肉体的強さと衝動的な行動を強調し、優しさや傷つきやすさを抑圧し、男女間の関係を機能的なものとみなす。一方、現代的な男性役割では、対人関係を円滑にする技術を重要視し、優しさや親密さが奨励されると同時に感情的なクールさが尊ばれ、男女間の親密な関係が求められるとした。詳しくは、Pleck, J.H., *The Male Sex Role: Definitions, Problems, and Sources of Change*, *Journal of Social Issues*, 32(3), 1976, pp.155 - 164. および、Pleck, J.H., *The Myth of Masculinity (Third Edition)*, The MIT Press, 1987. を参照。

<sup>17</sup> 詳しくは、O'Neil, J.M., *Patterns of Gender Role Conflict and Strain: Sexism and Fear of Femininity in Men's Lives*, *Personnel and Guidance Journal*, 60(4), 1981, pp.203 - 210. を参照。

る<sup>18</sup>。

他にも、McCreary (1994) は、優しさや養育的態度や他者に助けを求めるなどといった「女らしさ」や弱さと少しでも結び付けられるような特性は、「男らしさ」を損なうものと認識され、ジェンダー役割からの逸脱は、一般に女性に対してよりも男性に対しての方が問題視されると指摘している<sup>19</sup>。

## 2.2 男性のコミュニケーション特性

前節までで整理した議論を踏まえると、男性の特質と男性のジェンダー役割は、男性家族介護者に他者と心を通い合わせるスキルの未発達をもたらしていると考えられる。そこで、本節では、伝統的な男性規範だけではなく男性のコミュニケーション特性も、男性家族介護者の介護役割遂行に困難をきたしているのではないかという問題意識の下、男性のコミュニケーション能力の形成要因に焦点をあて、男性のコミュニケーション特性を3つの観点から整理する。

### 2.2.1 幼児期における男性の育てられ方

Chodorow (1978 = 1981) によれば、男性のコミュニケーション能力の弱さは、幼児期における男性の育てられ方に由来していると指摘している。男女の性差が強調される社会において、女性である母親は、男子に対して「お前は男だ」という態度で接しやすい。すなわち、男子は女子に比べて、母親からの精神的な分離を強く要求される傾向が見られる。最も重要な他者である母親から切り離された男子は、自分を取り巻く外界との関係に距離を取る傾向、すなわち、

客観性を重視する傾向を保持しやすい。そのことは、男子に他者との「共感能力」や「親密さ」の感情を抑制させることにもつながる。そして、他者との「共感能力」や「親密さ」の感情を抑制することが、冷静に外界に対応するといった男性の心理的傾向を生み出し、また、他者との「共感能力」や「親密さ」への忌避傾向を作り出すとしている<sup>20</sup>。

### 2.2.2 感情を統制する男性の道徳観

男性のみを対象に道徳判断の研究を行なった Kohlberg (1969) は、個人の権利の優位性や正義で道徳判断をすることを頂点とする冷徹な道徳判断（以下、「権利と正義の道徳」と呼ぶ）に至る6つの発達段階を提示している。すなわち、Kohlberg (1969) は、男性の行動原理を、自己の欲求や感情を統制し、規則や規範に従った形式的な正しさを追求する「権利と正義の論理」であるとしている<sup>21</sup>。

このようなKohlberg (1969) の男性中心・男性論理の研究に対して、Gilligan (1982 = 1986) は、その著書“*In a Different Voice: Psychological Theory and Women's Development*”のなかで、Kohlberg (1969) が見落としている別の道徳観、すなわち、他者への思いやりと責任の観点からの道徳判断（以下、「ケアの道徳」と呼ぶ）があることを訴えている<sup>22</sup>。Gilligan (1982=1986) が提唱する「ケアの道徳」は、Kohlberg (1969) が提唱する、人間関係や他者への温情に流されずに、自立や普遍的な倫理をよしとする「権利と正義の道徳」とは異なる。このように、男性は対人関係において感情の統制を要求されるため、内面的な問題を抱えた場合でも、他者に自己開示することが困難なので

<sup>18</sup> 詳しくは、Doyle, J.A., *The Male Experience (Second Edition)*, Brown Company, 1989. を参照。

<sup>19</sup> 詳しくは、McCreary, D.R., *The Male Role and Avoiding Femininity*, *Sex Roles*, 31(9/10), 1994, pp.517 - 531. を参照。

<sup>20</sup> 詳しくは、Chodorow, N., *The Reproduction of Mothering: Psychoanalysis and the Sociology of Gender*, University of California Press, 1978. (大塚光子・大内菅子訳『母親業の再生産—性差別の心理・社会的基盤』新曜社, 1981年)を参照。

<sup>21</sup> 詳しくは、Kohlberg, L., *Stage and Sequence: The Cognitive-Developmental Approach to Socialization*, In D. A. Goslin (Eds.), *Handbook of Socialization Theory and Research*, Rand McNally, 1969, pp.347 - 480. を参照。

<sup>22</sup> 詳しくは、Gilligan, C., *In a Different Voice: Psychological Theory and Women's Development*, Harvard University Press, 1982. (岩男寿美子監訳、並木美智子・生田久美子訳『もうひとつの声—男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティ』川島書店, 1986年)を参照。

<sup>23</sup> 榎本博明「男性アイデンティティの揺らぎ」(榎本博明編『現代のエスプリ別冊 セルフ・アイデンティティ—拡散する男性像』至文堂, 2007年), 13ページによれば、男性の自己開示度の低さは、男性が感情を表出するコミュニケーションに不慣れなこととの表れとみることができると指摘している。また、同書, 24ページでは、自己開示の抑制は、他者との親密な「関係性」を形成する妨害要因になり、「男性は独立的でなければならない」といった男性役割の規範にも関係していると考察している。

あろう<sup>23</sup>。

### 2.2.3 職業生活が男性のコミュニケーション能力に及ぼす影響

伊藤（1996）によれば、企業社会の論理は、男性の感情表現を含めたコミュニケーション能力をさらに削ぐ要因になっていると指摘している。すなわち、仕事上の会話では無駄や過不足は許されず、相手に言質をとられないような配慮が必要なため、自分の思いを素直に語ったり、感情表現をしたりすることは難しい。こうした背景があり、他者との深い感情的つながりを表現するようなコミュニケーション能力は、男性から一層奪われていくとしている<sup>24</sup>。

また、現代日本語研究会（2002）によれば、職業生活では、論理や抽象かつ明晰で簡潔な表現が重視される「レポート・トーク」が、他方、家庭生活や地域社会では、感情を汲み取り共感的かつ具体的な表現を特徴とする「レポート・トーク」が、それぞれ多用され身についていくと指摘している<sup>25</sup>。すなわち、仕事中心の生活スタイルが身に付いている男性は、情報伝達や情報交換を中心とする「レポート・トーク」に傾斜しがちであり、感情表現に関わる「レポート・トーク」を不得手としているといえるだろう。このように、合理性や効率性が重視される職業生活は、男性の感情表現を含めたコミュニケーション能力に弊害を与えている可能性があることが示唆される。

## 2.3 小 括

ここまで、男性性の特質と男性のジェンダー役割について明らかにし、伝統的な男性規範だけではなく男性のコミュニケーション特性も、男性家族介護者の介護役割遂行に困難をきたしているのではないかという問題意識の下、男性のコミュニケーション能力の形成要因に焦点をあて、男性のコミュニケーション特性を3つの

観点から整理した。

その結果、「男は弱みを見せない」、「男は弱音を吐かない」、「男は常に冷静で感情を抑制しなければならない」、「男は独立的でなければならない」、「問題は自分ひとりで解決しなければならない」といった伝統的な男性規範だけではなく、(1)Chodorow（1978 = 1981）が指摘した男性に現れる他者との「共感能力」や「親密さ」への忌避傾向や、(2)Kohlberg（1969）が指摘した感情を統制する男性の道徳観、(3)伊藤（1996）と現代日本語研究会（2002）が指摘した職業生活の影響による男性の感情表現を含めたコミュニケーション能力の欠如といった男性のコミュニケーション特性も、男性家族介護者の介護役割遂行に困難をきたしている可能性があることが示唆された。以上の論考から、男性のコミュニケーション特性は伝統的な男性規範とともに、男性家族介護者にとって対人関係における「親密さ」を獲得することを困難にしていると推測される。

## 3. 男性家族介護者における男性性と男性のコミュニケーション特性

本章では、男性規範の呪縛のなかで男性家族介護者が抱える介護役割遂行の困難さを、男性性と男性のコミュニケーション特性の視点からアプローチするために、男性家族介護者の先行研究のなかから、一瀬（2004）、羽根（2006）、津止・斎藤（2007）、森（2008）、Davies et al.（1986）、Harris（1993）、Russell（2004）の研究を取り上げ、男性性と男性のコミュニケーション特性に関わる論点の整理と考察を行なう。

### 3.1 男性家族介護者に関する先行研究

一瀬（2004）は、70代の男女（男性175名、女性171名）の配偶者介護者を対象として、文章完成法調査を行なっている。その結果、妻の介護体制に責任をもって自分が全てマネジメン

<sup>24</sup> 伊藤公雄『男性学入門』作品社、1996年、326ページによれば、競争力や力関係の作用する男性社会で生き抜いていく意識に凝り固まった男性にとって、他者との対等なコミュニケーションをすることは、困難であると推測されるとしている。その理由として、常に、上下関係や利害関係の絡むコミュニケーションを強いられている点を挙げている。

<sup>25</sup> 詳しくは、現代日本語研究会編『男性のことば・職場編』ひつじ書房、2002年、を参照。

トしているという自負に現れる家族への責任感とともに、介護困難も自分ひとりだけで解決しようとし、他者に相談しない傾向が多いことが指摘されている<sup>26</sup>。

羽根（2006）は、介護殺人・心中事件の新聞記事（60歳以上の家族介護者の178例）から、男性介護者が加害者となりやすい要因を、家族介護の一般的特質やジェンダーの視点から分析している。その結果、多くの男性介護者は身近な支援者もなく社会的サービスも利用せずに、社会的に孤立している傾向が見出された。また、情報が十分な事例30件（夫16件、息子14件）について分析し、男性介護者が介護殺人・心中事件へと追い込まれやすい要因として、「介護への強い動機づけ」と「周囲からの高い評価」の影響を挙げている。同居家族がいても自分ひとりで介護を抱え込み、行政機関に相談しない傾向が多く見られた。その背景には、「自分ひとりで介護する」という決意の貫徹、「男は弱音を吐かない」、「男は愚痴をこぼさない」といった男性規範の影響もあると考察している。そして、一般に女性の役割とみなされがちな介護を担うからこそ、余計に男性としてのアイデンティティを保持するためのジェンダー規範を強く内面化していると考察している<sup>27</sup>。

津止・斎藤（2007）は、『男性介護者の介護実態に関する全国調査<sup>28</sup>』を行ない、同居家族からの支援内容と地域関係を中心とするネットワークについて検討している。同居家族からの具体的な支援内容をみると「家事・介護の手伝い」といった物理的支援・代替の割合が高い一方で、「介護の相談」、「愚痴」、「気晴らしの相手」といった情緒的支援は相対的に低くなっている傾向が確認されている<sup>29</sup>。また、介護開始後の地域関係の変化をみると、地域関係の縮小

とともに地域関係が途絶える傾向が確認されている<sup>30</sup>。

森（2008）は、在宅介護を行なっている男性家族介護者7名を対象にインタビュー調査を実施している。その結果、地域関係の変化として「付き合いが少なくなる」、「男性家族介護者は、女性の多い会になかなか入れない」といったような、社会との関わりが縮小している傾向が見られた。また、「男同士の飲み友達が欲しい」といった社会や仲間との関わりを意識し、気晴らしができる仲間を求める声も聞かれた<sup>31</sup>。

ここで、欧米の研究に目を転じてみたい。介護ストレスに関する調査研究を行なったDavies, et al. (1986) は、ストレスに関する性差の存在は、男性にストレス経験が少ないことの証明ではなく、むしろ否定的な影響を外部にさらそうとしない結果である可能性を指摘している<sup>32</sup>。同様に、男性介護者のソーシャル・サポートに関するRussell (2004) の調査研究においても、外部にサポートを求めることを不名誉であると感じ、外部のサポートを活用しないことを男性介護者の一般的傾向として指摘している<sup>33</sup>。また、Harris (1993) は、アルツハイマー病患者の介護を行なっている男性介護者15名に対して面接調査を行ない、男性介護者から語られた共通のテーマを提示している。その結果、面接調査で最も多く語られた共通のテーマのひとつとして「社会的孤独・仲間付き合いの喪失」という項目を報告している<sup>34</sup>。

## 3.2 考察—男性性と男性のコミュニケーション特性を中心に

前節までで、男性家族介護者の先行研究のな

<sup>26</sup> 一瀬貴子『「介護の意味」意識からみた、高齢配偶介護者の介護特性—高齢男性介護者と高齢女性介護者との比較』『関西福祉大学研究紀要』第7号、2004年、75 - 90ページ。

<sup>27</sup> 羽根文「介護殺人・心中事件にみる家族介護の困難とジェンダー要因—介護者が夫・息子の事例から」『家族社会学研究』第18巻第1号、2006年、27 - 39ページ。他にも、男性が家事や介護役割を担うことを社会が特別視する傾向も、男性介護者を一層介護に打ち込ませ、他者に相談しにくくさせる要因であると指摘している。

<sup>28</sup> 全国20の医療生協(17都府県)にある介護事業所、病院・診療所の職員を通じて500部配票し、郵送による回収を行なった。有効回収票数295票、有効回収率59%であった。詳しくは、津止・斎藤(2007)、39 - 109ページを参照。

<sup>29</sup> 同書、52ページ。

<sup>30</sup> 同書、63 - 66ページ。

<sup>31</sup> 森詩恵「男性家族介護者の介護実態とその課題」『大阪経大論集』第58巻第7号、2008年、101 - 112ページ。

<sup>32</sup> Davies, H., Priddy, J.M., and Tinklenberg, J.R., Support Groups for Male Caregivers of Alzheimer's Patients, *Clinical Gerontologist: The Journal of Aging and Mental Health*, 5(3/4), 1986, pp.385 - 395.

<sup>33</sup> Russell, R., Social Networks among Elderly Men Caregivers, *The Journal of Men's Studies*, 13(1), 2004, pp.121 - 142.

<sup>34</sup> Harris, P.B., The Misunderstood Caregiver? A Qualitative Study of the Male Caregiver of Alzheimer's Disease Victims, *The Gerontologist*, 33(4), 1993, pp.551 - 556.

かから、男性性と男性のコミュニケーション特性に関わる論点を抽出し、知見の整理を行なった。男性家族介護者の先行研究から得られた知見を整理すると、問題を自分ひとりで抱え込み他者に相談しない傾向や、地域関係が縮小し社会的に孤立する傾向が見られることが浮き彫りになった。また、男性家族介護者を取り巻くこれらの傾向は、わが国と欧米で大きな差異がないことも明らかになった。

このように、伝統的な男性規範だけではなく男性のコミュニケーション特性も、男性家族介護者の介護役割遂行に困難をきたしている可能性があることが示唆された。男性家族介護者は、男性性と男性特有のコミュニケーション特性の影響のために、自身の否定的な感情を吐露することが少ない傾向が見られ、男性家族介護者が抱えている困難は表面化しにくいと考えられる。これまで男性の場合、仕事中心の生活を送ることが「男らしさ」の証明とされてきた。しかしながら、いわゆる「会社人間」、「企業戦士」といった言葉に象徴される仕事中心の生活スタイルが、職業生活からの引退後に弱点となって現れている。すなわち、男性は地域社会における他者との「関係性」をこれまで置き去りにしてきたわけであるが、職業生活からの引退後においては、地域社会における「関係性」の再構築が、男性家族介護者にとって特に必要であると考えられる。

#### 4. おわりに

本稿では、男性規範の呪縛のなかで男性家族介護者が抱える介護役割遂行の困難さを、男性性と男性のコミュニケーション特性の視点から考察した。最後に、男性性と男性のコミュニケーション特性の影響のために、地域関係や社会関係が希薄になりがちな男性家族介護者の社会的

孤立を防ぐための支援策をまとめる。

伊藤 (1996) は、男性の開かれたコミュニケーションを実現するために、(1)家庭生活におけるコミュニケーションの開発、(2)地域社会におけるコミュニケーションの開発、(3)職域以外の友人関係の開発、の3点を挙げている。そのうえで、男性のネットワーク作りを提案しており、この男性のネットワーク「男縁」のなかから、今後の男性のコミュニケーション能力の開発と、新しい男性の生活スタイルが生み出されていくとしている<sup>35</sup>。

同様に、多賀 (2006) も、男性の老年期というライフサイクル上の危機をめぐって、「いかに地位や肩書きといった『社縁』的な関係から自由になり、等身大の人間としての弱みや悩みを共有できるような『男縁』を築けるかどうか」を課題として提示している<sup>36</sup>。

本稿では、男性性と男性のコミュニケーション特性に配慮した男性家族介護者への支援策として、男性のネットワーク作り以外にアサーション・トレーニング (assertion training) を提案したい。園田 (2008) によれば、アサーション・トレーニング (assertion training) とは、このアサーション、換言するならば「自分の考えや意見、感情、相手への希望などを（表現したい場合は）率直に正直に、しかも適切な方法で表現する<sup>37</sup>」ことを、一定のトレーニングを触媒として育成していくものである。すなわち、アサーションの体得を通じて、自己信頼・自尊感情や他者とのよりよい人間関係づくりの力をも醸成することを目指すのが、アサーション・トレーニング (assertion training) であると述べている<sup>38</sup>。このように、アサーション・トレーニング (assertion training) は、地域関係や社会関係の再構築の一助として、自身の否定的な感情を吐露することが少ない傾向が見られる男性家族介護者の社会的孤立を防ぐひとつの支援策になりうるのではないだろうか<sup>39</sup>。

<sup>35</sup> 伊藤(1996), 328 - 331ページ。

<sup>36</sup> 多賀太「つくられる男のライフサイクル」(阿部恒久・大日方純夫・天野正子編『男性史3 「男らしさ」の現代史』日本経済評論社, 2006年), 186ページ。一方、高齢女性たちの強さは、「女縁」を通して培われてきた、悩みや弱さを認め合い共有し合える対等で親密なネットワークによって支えられているとしている。

<sup>37</sup> 詳しくは、平木典子『アサーション・トレーニング—さわやかな(自己表現)のために』日本・精神技術研究所, 1993年, を参照。

<sup>38</sup> 園田雅代「アサーション・トレーニングを求める男性—男性が自分らしく生きるということ」(柏木恵子・高橋恵子編『日本の男性の心理学—もう1つのジェンダー問題』有斐閣, 2008年), 269ページ。

<sup>39</sup> 高橋・湯川(2008), 68ページにおいても、攻撃性によってしか自己表現を許されてこなかった「ジェンダーの病」の重い男性にこそ、アサーション・トレーニングが有効ではないかと指摘している。

## 参考文献

- Brannon, R., *The Male Sex Role: Our Culture's Blueprint of Manhood and What It's Done for Us Lately*. In D. David and R. Brannon (Eds.), *The Forty-Nine Percent Majority: the Male Sex Role*, Addison - Wesley, 1976, pp. 1 - 48.
- Chodorow, N., *The Reproduction of Mothering: Psychoanalysis and the Sociology of Gender*, University of California Press, 1978. (大塚光子・大内萱子訳『母親業の再生産—性差別の心理・社会的基盤』新曜社, 1981年)。
- Connell, R.W., *Masculinities*, Polity Press, 1995.
- Davies, H., Priddy, J.M., and Tinklenberg, J.R., Support Groups for Male Caregivers of Alzheimer's Patients, *Clinical Gerontologist: The Journal of Aging and Mental Health*, 5 (3/4), 1986, pp.385 - 395.
- Doyle, J.A., *The Male Experience (Second Edition)*, Brown Company, 1989.
- 榎本博明『自己開示の心理学的研究』北大路書房, 1997年。
- 榎本博明「男性アイデンティティの揺らぎ」(榎本博明編『現代のエスプリ別冊 セルフ・アイデンティティ—拡散する男性像』至文堂, 2007年), 9 - 29ページ。
- 現代日本語研究会編『男性のことば・職場編』ひつじ書房, 2002年。
- Gilligan, C., *In a Different Voice: Psychological Theory and Women's Development*, Harvard University Press, 1982. (岩男寿美子監訳, 並木美智子・生田久美子訳『もうひとつの声—男女の道德観のちがいと女性のアイデンティティ』川島書店, 1986年)。
- 羽根文「介護殺人・心中事件にみる家族介護の困難とジェンダー要因—介護者が夫・息子の事例から」『家族社会学研究』第18巻第1号, 2006年, 27 - 39ページ。
- Harris, P.B., *The Misunderstood Caregiver? A Qualitative Study of the Male Caregiver of Alzheimer's Disease Victims*, *The Gerontologist*, 33 (4), 1993, pp.551 - 556.
- 平木典子『アサーション・トレーニング—さわやかな(自己表現)のために』日本・精神技術研究所, 1993年。
- 平木典子『図解 自分の気持ちをきちんと(伝える)技術—人間関係がラクになる自己カウンセリングのすすめ』PHP研究所, 2007年。
- 池田理知子「『高齢者』・ジェンダー・アイデンティティ」『ジェンダー&セクシュアリティ』(国際基督教大学)第4号, 2009年, 3 - 15ページ。
- 一瀬貴子「『介護の意味』意識からみた、高齢配偶介護者の介護特性—高齢男性介護者と高齢女性介護者との比較」『関西福祉大学研究紀要』第7号, 2004年, 75 - 90ページ。
- 伊藤公雄『『男らしさ』のゆくえ—男性文化の文化社会学』新曜社, 1993年。
- 伊藤公雄『男性学入門』作品社, 1996年。
- 伊藤公雄『新訂 ジェンダーの社会学』放送大学教育振興会, 2008年。
- 春日キスヨ『介護問題の社会学』岩波書店, 2001年。
- 加藤悦子『介護殺人—司法福祉の視点から』クレス出版, 2005年。
- 小林篤子『高齢者虐待—実態と予防策』中央公論社, 2004年。
- Kohlberg, L., *Stage and Sequence: The Cognitive-Developmental Approach to Socialization*, In D. A. Goslin (Eds.), *Handbook of Socialization Theory and Research*, Rand McNally, 1969, pp.347 - 480.
- McCreary, D.R., *The Male Role and Avoiding Femininity*, *Sex Roles*, 31 (9/10), 1994, pp.517 - 531.
- 森詩恵「男性家族介護者の介護実態とその課題」『大阪経大論集』第58巻第7号, 2008年, 101 - 112ページ。
- 無藤清子「介護とジェンダー—高齢者介護を担う男性と女性の問題」(柏木恵子・高橋恵子編『日本の男性の心理学—もう1つのジェンダー問題』有斐閣, 2008年), 133 - 140ページ。
- O'Neil, J.M., *Patterns of Gender Role Conflict and Strain: Sexism and Fear of Femininity in Men's Lives*, *Personnel and Guidance Journal*, 60 (4), 1981, pp.203 - 210.
- Pleck, J.H., *The Male Sex Role: Definitions, Problems, and Sources of Change*, *Journal of Social Issues*, 32 (3), 1976, pp.155 - 164.
- Pleck, J.H., *The Myth of Masculinity (Third Edition)*, The MIT Press, 1987.
- Russell, R., *Social Networks among Elderly Men Caregivers*, *The Journal of Men's Studies*, 13 (1), 2004, pp.121 - 142.
- 斎藤真緒「日本における男性介護者支援の課題—『男性介護者と支援者の全国ネットワーク』の取り組みから」『生活協同組合研究』第403号, 2009年, 41 - 48ページ。
- 斎藤真緒「男が介護するということ—家族・ケア・ジェンダーのインターフェイス」『立命館産業社会論集』第45巻第1号, 2009年, 171 - 188ページ。
- 園田雅代「概説：アサーション・トレーニング」『創価大学教育学部論集』第52号, 2002年, 79 - 90ページ。
- 園田雅代「アサーション・トレーニング—自己表現に及ぼすジェンダーの影響」(柏木恵子・高橋恵子編『心理学とジェンダー—学習と研究のために』有斐閣, 2003年), 215 - 221ページ。
- 園田雅代「アサーション・トレーニングを求める男性—男性が自分らしく生きるということ」(柏木恵子・高橋恵子編『日本の男性の心理学—もう1つのジェンダー問題』有斐閣, 2008年), 269 - 274ページ。



鈴木淳子「ステレオタイプとジェンダー—男性性・女性性の変化」（鈴木淳子・柏木恵子『心理学の世界（専門編5）ジェンダーの心理学—心と行動への新しい視座』培風館、2006年）、69 - 101ページ。

鈴木淳子「男性性とメンタルヘルス—男らしさの代償？」（柏木恵子・高橋恵子編『日本の男性の心理学—もう1つのジェンダー問題』有斐閣、2008年）、24 - 28ページ。

多賀太『男性のジェンダー形成—（男らしさ）の揺らぎのなかで』東洋館出版社、2001年。

多賀太「男性のエンパワーメント？—社会経済的变化と男性の『危機』」『国立女性教育会館研究紀要』第9号、2005年、39 - 50ページ。

多賀太「つくられる男のライフサイクル」（阿部恒久・大日方純夫・天野正子編『男性史3「男らしさ」の現代史』日本経済評論社、2006年）、158 - 190ページ。

多賀太『男らしさの社会学—揺らぐ男のライフコース』世界思想社、2006年。

多賀太「男性のジェンダー形成における抵抗」（榎本博明編『現代のエスプリ別冊 セルフ・アイデンティティ—拡散する男性像』至文堂、2007年）、46 - 54ページ。

高橋恵子・湯川隆子「ジェンダー意識の発達—男らしさもつくられる」（柏木恵子・高橋恵子編『日本の男性の心理学—もう1つのジェンダー問題』有斐閣、2008年）、53 - 73ページ。

Thompson, Jr., E.H. (Eds.), Older Men's Lives, Sage, 1994.

津止正敏「うつろう家族 夫、息子—増える男性介護」『月刊ケアマネジメント』第18巻第12号、2007年、14 - 18ページ。

津止正敏「家族介護者支援のリアリティ—男性介護者研究からの提言」『高齢者虐待防止研究』第5巻第1号、2009年、32 - 38ページ。

津止正敏「介護で孤立しないネットワークづくり—男性介護者の介護実態と支援実践から」『地方自治職員研修』第42巻第10号、2009年、17 - 19ページ。

津止正敏・斎藤真緒『男性介護者白書—家族介護者支援への提言』かもがわ出版、2007年。

津止正敏・斎藤真緒「家事にうろたえ、孤立に悩む夫たち、息子たち—全国調査データが示した“現実”」『論座』（朝日新聞社）第147号、2007年、261 - 268ページ。

Ungerson, C., Policy is Personal: Sex Gender and Informal Care, Tavistock, 1987. （平岡公一・平岡佐智子訳『ジェンダーと家族介護—政府の政策と個人の生活』光生館、1999年）。